

令和8年度 入学式告辞

このたび入学されました新入生の皆さん、そして保護者の皆さま、まことにおめでとうございます。今日のおき日に、310名の新入生を迎えまして、金光藤蔭高等学校の入学式を挙行できますことは、この上ない慶びです。また、公私ともに何かとお忙しい中を、ご臨席を賜りましたご来賓の皆さまには、改めて厚く御礼申し上げます。

家に救急箱は置いてありますか？」と聞かれたら、多くの人は「ありますよ」と答えるでしょう。今の時代、家庭には消毒薬など薬を入れた救急箱は備えてあるだろうと思われる。産業医の海原純子さんが「怪我をした時のために、救急処置の用意があることはもちろん大事だけれど、救急箱は『体のためのもの』だけではなく、『心のためのもの』としてもまた必要で大事だ」と提言していました。

本校は、金光教の教えに基づく建学精神をもって設立された、金光教ゆかりの学園であり、今年は母体となる学校法人とともに、創立百周年という節目を迎えました。今日から新しくスタートする新入生の皆さんの学園生活を、ここからしっかりと見守り、サポートしてまいりたいと思います。本校に、新しく皆さん方をお迎えするに当たって、思う所を、少し申し述べます。

この提言に関しては、2つの大事な視点があるようです。1つは、「心の救急箱とはなんぞや」という具体的な説明を聞きたいという点です。もう1つは、なぜこの方がそういう提言をされたのか、その理由を聞いてみたいという点です。産業医(つまりお医者さん)として日ごろ接する人たちの現状を危惧した提言だとすれば、それは今の私たちに直接関わる問題だからです。

海原さんは「例えば、包丁で手を切ってしまった時のことを考えてみて下さい。まず急いで傷口を洗い、消毒して薬を塗り、絆創膏を貼るはず。怪我をしてから早い対処が不可欠です」と言われます。それと同様に「自分は心が折れやすいとか、すぐへこむから弱い、とぼやく人がいる。折れたりへこんだりしても回復する力を増やすことが大事で、それには救急処置が必要だ」ということです。いわば、心が怪我を負った時に必要な早い処置を施すためのツールが、『心の救急箱』なのだそうです。そういうツールを、個人がそれぞれに持っていることが大事だと海原さんは訴えています。

海原さんが『心の救急箱』の必要性を訴えられた背景には、そういうツールを持っているのと持っていないのでは大違いなのに、どうも現実はそうならない、皆『心のケア』に対する意識が低いといった危機感があるようです。先ほどの切り傷の例で言えば、「もし傷口を放置したら出血が止まらなくなったり、傷口から細菌感染がおきて化膿したりする。すぐに救急処置をして必要に応じて受診したりするでしょう。『心のケア』もそれと同じはずなのですが、なぜか同じように救急処置をしない」と海原さんは言われるのです。

これは海原さんの経験から出た言葉だと思います。「事件は現場で起こっているんだ」という刑事ドラマの有名なセリフがありました。まさに現場で相談を受けた人たちを実際に見てきた人の言葉ですから、信用に足る分析なのです。そして心の怪我をそのままにした結果についても、海原さんの経験則が参考になります。「嫌なことを言われて心が傷ついてもじっと我慢したり、理不尽なことをされてカッとしても、怒りをかみ殺して平気な顔をしてみせたりする。つまり傷ついた時に、そのまま放置して救急処置しないまま過ごしてしまう。そのため、後から思いだして怒り、発作が起きたり、アルコールをがぶ飲みしたりする」と海原さんは語っておられます。アルコールの選択肢は皆さん方には無縁でしょうが、実例として『心の救急処置』をしないと、こんな結果になるのだということが分かります。

本学園では、心を豊かにするという教育精神を、今日まで大切にしてきました。豊かな心は豊かな人間性を育み、豊かな人生へと繋がります。しかしながら一方で、その心はガラス細工のように壊れやすいようです。誰もが周りから認められ、評価され、尊敬される人間でありたいと願います。心の豊かさは、自己成長とも結びつく様々な心の可能性を秘めた言葉ですが、同時に『心の救急箱』が必要だと言われる時代にあって、自分の心が傷を負ったら軽く考えず、自分の心を大切に、いたわり、守ってあげる意識も大切だということを知ってほしいと思います。心は育てるものであり、守るべきものでもあるということです。

ちなみに海原さんから『心の救急処置』の具体例として、「心が傷つくことが1つあったら、その後すぐに気持ちがちょっとだけほっとすることを3つする」という方法が示されていました。大層なことではなく、体を動かすことや深呼吸、ストレッチなどが効果的だと言います。大事なものは、すぐ使える『心の救急ツール』を持つておくことだそうです。

最後に、皆さん方の今日から始まる学園生活が、明るく楽しい希望に満ちた毎日になっていくよう、改めて願いをかけまして、縁あって本学の門をくぐられた皆さん方への告辞といたします。